

中国文芸研究会 2024 年度総会議案書

中国文芸研究会は、研究誌『野草』を年二回、『中国文芸研究会会報』（以下『会報』と略）を年十一回刊行し、例会を年十回開催している。さらに、夏期合宿を企画し、有志による研究会も幾つか継続的に運営されている。

しかし、研究会を取り巻く環境は、年々厳しさを増している。中国文学を専攻する学生・大学院生数は全国的に減少の一途をたどり、事務局メンバーの多くが所属する大学の運営方針も大きく変化している。会員は年々忙しくなる一方である。

こうした情勢にあって、学会組織とは異なる民間の研究団体が、会費と純粋な研究心だけに支えられて活動を維持してゆくには、これまで以上に実質的な事務局体制の整備と、学会や研究機関の活動とは一定程度差別化された、独自の研究活動の展開が求められるだろう。本研究会は、目先の成果にとらわれず、のびやかに研究と好奇心をひろげ、相互交流を深めながら、じっくり息の長い、地に足の着いた研究活動を続けることのできる場でありたいと願う。

実際の研究活動については、以下に記すように、各セクションにおいて工夫がこらされ、活性化がはかられている。こうした活動を『野草』や『会報』の紙面に極力反映させ、課題を広く会員と共有し、今年も積極的に研究会の運営に努めてゆきたい。

さて、2023 年 5 月より新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が 2 類相当から 5 類へと移行されたことに伴い、今年度の例会は、従来通り、対面での開催を基本とするが、適宜オンラインでも開催する。開催方法については、随時、中国文芸研究会のホームページをご確認いただきたい。

今年度も、研究の元手である健康には十分注意を払い、慎重かつ果敢に、研究活動を推進してゆきたい。

I. 2023 年度活動報告

*会員数は***名（2024 年 3 月 31 日現在）。

*運営面では、事務局の役割分担がほぼ定着し、円滑な研究会活動が行われた。今後とも事務局体制を維持・更新してゆく人材の確保・育成が重要である。

以下、セクションごとに活動状況を報告する。

(1) 『野草』刊行（担当：）

*第 111 号（2022 年 9 月 30 日／編集担当：）を予定通り刊行した。特集は設けず、4 本の論文を掲載した。

*第 112 号（2023 年 3 月 31 日／編集担当：）を予定通り刊行した。論文 3 本、研究案内 1 本、および 15 名の執筆者による小特集「名著再読 中国現代文学研究」を掲載した。

(2) 『会報』発行（担当:永井・三須・中野ほか会報担当者）

*前年に引き続き 2023 年度も永井英美をリーダー、三須祐介をサブリーダーとして活動し、各月担当者がそれぞれ編集作業を行った。2023 年度 4 月号(498 号)=河本、5 月号(499 号)=羽田、6 月 7 月 8 月 9 月 10 月 号=500 期記念号(500～504 号)=全員、11 月号(505 号)=唐、12 月号(506 号)=和田、1 月号(507 号)=小笠原、2023 年度 2 月 3 月合併号(508、509 号)=津守、

*担当者は「会報担当者 ML」に版下をアップし、有志でチェックしたのちに PDF を作成し、各月の例会終了後電子版を配信し、また木村桂文社に入稿した。

*6～10 月号(500～504 号)を『500 期記念号』として冊子体の合併号を発行した。また 12 月例会で『500 期記念号』の合評会を行った。会員諸氏および担当者のご協力に深く感謝する。

*会員からの投稿、21 年度から続く「書評の会・出店」よりの投稿、などのおかげで、おむね記事が枯渇することなく発行を続けることができた。

- *「交流」欄は、事務局 ML に挙がる情報などを活用した。
- *2019 年度までは例会開催時に会報発送作業を行ってきた。しかし 2020 年度からは例会がオンライン主体となり、紙版の会報は事務局有志のご尽力で、主に『野草』の発送と同時にまとめて発送している。
- *会報電子版登録者は、現在のべ 208 名である(複数アドレス登録者あり)。
- *例会報告は報告者が執筆し、発表の翌月発行の会報に掲載した。
- *会報印刷費はあらかじめ会計係からサブリーダー三須が予算を預かり、木村桂文社からの請求に応じてその都度支払った。

(3)「例会」開催(担当:濱田)

*前年度はオンラインから対面への転換/混在期となった。具体的には以下の通り。

- 4月 オンライン
- 5月 オンライン
- 6月 ハイフレックス(同志社)
- 7月 ハイフレックス(京大。宋明煒氏の講演会と共催)
- 9月 オンライン
- 10月 同志社(対面のみ)
- 11月 関西大学(ハイフレックス)
- 12月 同志社(対面のみ)
- 1月 オンライン(香港文学特集)
- 3月 大阪公立大学(対面のみ)

*疫禍が一段落し、「企画ものなど特別な場合を除き、基本的には対面で行う」という方向性が確認された。ただ、参加者は漸減傾向で、対面の場合は 20 人に満たないことが多い。会場確保になかなか苦心している。

(4)「夏期合宿」(担当:大東・城山・和田・阿部沙・小川)

*夏期合宿(担当:大東和重・城山拓也・和田知久・阿部沙織・小川主税)は、8月28日から29日の1泊2日で、京都市の「ホテル佐野家」にて開催した。参加者は30名。1日目は特集「民国期小説を読み直す」(企画・小川主税)で、蕭紅の「棄児」と許地山の「春桃」を取り上げ、それぞれの作品につき4名の読解を披露していただいた。2日目は陳曉淇氏の研究発表のほか、青野繁治氏のご講演「自らの“研究”を省みる」を開催した。今回の合宿は新型コロナウイルスの流行に配慮し、1泊2日にとどめたものの、たいへん充実した内容であった。

(5)「自伝・回想録を読む会」(担当:絹川・今泉・大東・中野徹)

*『野草増刊号 中国 20 世紀自伝回想録解題集』を、中国文芸研究会 50 周年記念事業として発行することができた。執筆者、関係の皆様へ感謝申し上げます。海外の研究者へも献本し、多くの好意的な反応を頂いている。

(6)「京劇史研究会」(担当:松浦)

*本年度も残念ながらほとんど活動ができなかった。来年度を期したい。

(7)「書評の会・出店」(担当:大東・中野徹・津守)

*2021 度から「書評の会・出店」を開始した。国内外の若手を中心とする研究者が集まって書評を作成する、オンラインの研究会である。6月に第1回例会を開催し、7月の第2回から、2~3名の

担当者が書評の原稿を提出し、参加者が討議する形にて開催した。開催時間は主に毎月最終金曜日の夜 20 時から 22 時にかけて。2023 年 3 月までに計 19 回の例会を開催した。毎回の参加者は 15 名～20 名程度。成果は例会の翌月以降の会報に順次掲載している。例会で作成した以外の書評も含め、会報にこれまでの計 38 篇(2022 年度は 23 篇)の書評を掲載した。

(8)「特別事業」計画(担当:宇野木)

*一昨年 7 月、「中国文芸研究会設立 50 周年記念」事業の一環として『中国 20 世紀自伝回想録解題集』を『野草』増刊号と銘打って刊行(ただし特別事業としての予算支出はせずに済んでいる)して以降、「特別事業」には取り組めていない。

*今後も、研究会全体に関わる研究事業に関しては、合意の上、「特別事業」に位置づけて取り組んでいくことを確認する。

(9)「野草ネットワーク」(担当:青野・菅原・鳥谷・大東・宋新亜・鄭洲)

*レンタルサーバーによる研究会のネットワーク運営を続けている。

*WordPress 版の新ウェブサイト(<https://www.c-bungei.jp/wphp/>)を管理・運用した。旧サイト(<https://www.c-bungei.jp/bungei.shtml>)はアーカイブとして運用した。

*例会情報・会報目次・『野草』目次・夏合宿情報などの定期更新のみ、宋新亜と鄭洲が担当することになった。非定型の情報更新やサイト全体の統括は引き続き菅原が行った。

*事務局アドレス office[アットマーク]c-bungei.jp 宛のメールを事務局 ML に転送する作業は、2011 年度より菅原・鳥谷の複数担当制へと移行し、現在に至る。これにより、転送処理の相互チェックがはたらかき、転送ミスや対応漏れ等を防ぐことが可能となった。

*Google フォームを用いた入会申込書の運用を開始した。

*「野草 ML」(登録数のべ 130 件)は会員交流の場として、「事務局 ML」(登録数のべ 75 件)は運営に関わる意見交換や実務作業効率化の手段として重要な役割を果たした。「野草 ML」は依然あまり活発ではないが、気軽な情報交換の場として、一定の活用がなされた。

*「会報電子版配信用 ML」(登録のべ 198 件)は、コロナ禍による発送の遅滞により、登録者が増加しているが、会員数に比して依然登録数が少ない。さらに登録を呼びかけることと、アーカイブ化については、会報の送付先の一つをアーカイブ用アドレスとしているので、自動的に蓄積されている。読み出し方については、ネットワークマニュアルを作成し、事務局で共有している。

*『野草』第 108 号より、投稿専用のメールアドレスとして、新たに yecaobianji[アットマーク]gmail.com の運用を開始した。

II. 2024 年度活動方針

*事務局体制をしっかり安定させ、さらに研究活動の維持・向上に努める。

*そのため、(1)組織の維持管理を受け持つ会費管理・口座管理・事務局 ML、(2)研究活動の発表や広報を受け持つ例会・会場予約・二次会予約・夏合宿・『野草』・『会報』・ウェブサイト、(3)(2)とは異なる研究活動の場を提供する「書評の会・出店」・「京劇史研究会」及び新たな企画を立ち上げる「特別事業」、などが有機的に機能し、本研究会が十分に力を発揮できるよう、事務局・各セクションの役割分担を確認し、相互の連携を強めてゆきたい。

*大学院生を中心とする若手層および関西在住以外の会員にも、主体的、積極的な参加と役割分担を呼びかけるとともに、広く会員からの積極的な提言や取り組みを歓迎したい。

*研究活動の活性化には、例会報告や『野草』掲載論文などにおける研究水準の向上が不可欠であるが、そのためにも、これまで以上に多様な方法が試みられて良いだろう。

*なお、今年度の活動方法は変更される可能性がある。以下のセクションごとの活動方針も、現時点のものであることをお断りしておきたい。

1 各種研究活動について

(1) 『野草』刊行 (文責: 松浦)

* 『野草』の刊行は、研究会の中心事業である。刊行の継続と掲載論文の質的向上は、恒常的課題である。そのため、「例会報告→『野草』掲載→例会での合評会」という基本原則を守り、それぞれに充実させることを研究会活動の骨子とする。

* 編集担当者は、従来通り、執筆予定者との連絡を十分にとるだけでなく、独自の企画を立てる場合は、特に例会担当者との連携を密にする必要がある。

* 編集担当者は「『野草』編集の手引き」を活用し、締切りを厳守することにより、投稿原稿の審査(査読)や版下作成を含む全ての編集作業が円滑に進むように努める。

* 「『野草』編集の手引き」の現状を踏まえた改訂に着手する。

* 今年度も『野草』編集に関わる中・長期的な計画に基づき、編集担当者を決め、十分な余裕を持って編集作業が行えるよう努めなければならない。

* ただし、『野草』の編集・刊行・書店卸・海外発送・残部保管など多方面にわたる作業は、すでに会員のボランティアによっては支えきれないほどの負担となっており、『野草』の体制を抜本的に変更する必要性に迫られている。ここ数年重ねられてきた『野草』の年間刊行回数についての議論を踏まえ、2025年度以降、『野草』の年間刊行回数を一回とし、その年度の3月31日の刊行とする。今後の刊行計画は、以下の通りである。

・第113号=2024年3月末原稿提出〆切、2024年10月1日刊行。編集: 羽田朝子〔サポート未定〕。

・第114号=2024年9月末原稿提出〆切、2025年3月31日刊行。編集: 大東和重〔サポート未定〕。

・第115号=2025年9月末原稿提出〆切、2026年3月31日刊行。編集: 辜知愚〔サポート未定〕。

・第116号=2026年9月末原稿提出〆切、2027年3月31日刊行。編集: 宇野木洋〔サポート未定〕。

* 『野草』第113号編集委員会は、。

* 『野草』第114号編集委員会は、。

* 『野草』の書店卸・海外発送・残部保管についても、以下のように変更する。

2024年度は、『野草』の書店への卸作業、海外送付先への発送作業は、好並晶・中野徹の担当とする。バックナンバーの管理は引き続き藤野真子の担当とする。

2025年度以降は、『野草』の書店卸は廃止、海外送付先への発送作業は業務委託、バックナンバーを含む残部は廃棄する。

(2) 『会報』発行 (担当: 永井・三須・中野ほか、会報担当者)

〈編集について〉

* 永井英美をリーダー、三須祐介・中野徹をサブリーダーとして、各月担当者が編集作業にあたる。

* 原則として毎月12頁(原稿が十分にある場合は最大20頁)、3月末発行の2月3月合併号は24頁以内(原稿が十分にある場合は最大40頁)、とする。

* 版下完成後、事務局 ML に目次を送信する。その際、「繰り越し原稿が〇本ある/ない」という情報をわかりやすく書く。

* 原則として毎月原稿募集の広告を載せ、「締切りは毎月末、ただし原稿多数の場合、次号おくりになることもあることをご了承ください」という文言を入れる。

* 今年度は「メールアドレスをお知らせください」という文言および所定の google form と QR コードを会報の1ページ目に載せ、会員のメールアドレスを集める。

☆原稿は2号(2ヶ月)以上先送りしない。20頁以内でも対応できない場合、編集担当者は「会報担当者 ML」で相談する。

*原稿の依頼・採否等は編集担当者の裁量で行なうが、必要と考えた場合、リーダー、サブリーダーに相談し、最終的に事務局の判断に委ねることもできる。

*今後の編集担当は、以下の予定である。

2024年度4月号(510号)=松村、5月号(511号)=上原、6月号(512号)=南、7月号(513号)=阿部、8月号(514号)=豊田、9月号(515号)=田村、10月号(516号)=小川、11月号(517号)=宋、12月号(518号)=田中、1月号(519号)=大野、2月3月合併号=(520・521号)唐、
<参考>2025年度4月号(522号)=和田、5月号(523号)=池田、6月号(524号)=河本、7月号(525号)=羽田、8月号(526号)=島、9月号(527号)=小笠原、10月号(528号)=津守、11月号(529号)=未定、12月号(530号)=未定、1月号(531号)=未定、2月3月合併号(532・533号)=松村、

2026年度2月3月合併号=小川、2027年度2月3月合併号=宋、2028年度2月3月合併号=田中

*永井・中野は全体の統括と校正などを、三須は会計とメーリングリストの管理を担当する。この3名は必要があれば随時ピンチヒッターとして編集を担当する。

*例会のない2月は会報を発行せず、3月末に2月3月合併号を発行する。これまで中野、三須、大野、阿部、永井、和田、河本、島、豊田、上原、池田、津守が担当してきた。今年度は唐が編集を担当する。

<投稿について>

*【原稿送付先】office[アットマーク]c-bungei.jp

*投稿は原則としてe-mail添付とし、画像は印刷費削減のため、版下データに埋め込む。

*投稿の際、「中国文芸研究会会報」の原稿であることを明記する。締め切りは毎月末である。繰り越し原稿や先着原稿が多く20頁を超える場合は、締め切り前に届いてもやむをえず次号送りにすることがある。その場合次号で必ず掲載する。(上記☆参照)

*二重投稿原稿は受理しない。また投稿は原則として完成稿とし、著者校正は行わない。

<記事内容について>

*引き続き内容の充実と活性化を図ってゆく。

*「例会記録」は原則として800字～1000字をめどに例会報告者が執筆する。ただし講演や書評が行われる場合、あらかじめ記録者を決めておく。

<会報電子版について>

*会報電子版の運営は大東が行い、PDFファイルの作成と配信は各月の編集担当者が行う。配信の際、メールに目次を掲げる。

<「反響」について>

*記事に対する読後感やご意見をぜひお寄せいただきたい。前年度に引き続き係でも会報電子版送信時、文章に「ご感想をぜひこちらまで」などの文言とメールアドレスを入れるなどの対策を行う。

<発行・発送について>

◎**24年度**は、23年度とほぼ同様の手順、方法で発行・発送する。すなわち、

○例会日までに会報電子版を作成し、例会終了後に配信する。「直後」でなくても良い。

○配信後、版下を木村桂文社に送付。

○会報紙版の発送は『野草』発送時に数号まとめて同封する。(あるいは今年度クロネコゆうメールが使えるなら、同志社で例会が開催される月(6月、10月、12月?)に、同志社から発送? クロネコゆうメールについては調査中。)

◎**25年度以降**について、昨年度12月・3月例会でも相談させてもらい、会報担当者内部でも話し合いをもった。

○「電子版だけで良い」という意見も多い。とはいえ、次のような事情も存在する。

・紙版廃止＝電子版オンリーに即移行するのは抵抗感がある人もいる。

・会費は毎月の会報代も含んでいる。

- ・会報は木村桂文社にとっては、年間30万円弱の売り上げに相当する。『野草』発行も年1回にする、という議論が出ている現在、これまでさまざまな無理も聞いてもらった同社から、年間30万円弱の会報の売り上げをゼロにするのは道義的にも無理があるし心苦しい。
- よって紙版は年1回、1年分を合本として発行することを提案する。合本なら保管も容易で便利。すなわち**25年度から、月々の発送は電子版のみとし、紙版は年1回、1年分をまとめた「合本」として発行し、『野草』と一緒に(レターパックで?)発送する。**

<参考> 木村桂文社さんからの概算の見積もり…その1【年1回 合本作成】

●仕様

表紙:コート紙<135 kg>、片面カラー印刷

本文:上質紙<55 kg>、両面モノクロ印刷

その他:巻表紙製本

●費用

①**2021年** 年11回発行で合計140頁+α4頁=144頁、
…冊子体(合本)**250部**作成として 消費税込**212,000円**程

②**2022年** 年11回発行で合計162頁+α4頁=166頁、
…冊子体(合本)**250部**作成として 消費税込**239,000円**程
300部作成として 税込約257000円

(ほぼ直販原稿で微調整程度、1箇所への発送費用込)

●参考:2022年に支払った毎月の会報(300部の印刷費)を合計した金額は税込約**267000円**。

○これらを含め、事務局の仕事をスムーズに行うために、今年度は「メールアドレスをお知らせください」という文言および所定のgoogle formとQRコードを会報の1ページ目に載せ、会員のメールアドレスを集める。その際、ファーストとセカンド、2つのアドレスを書くような書式にする。(会報5月号より開始)

○25年度(あるいは25年度から何年間か)はこれで様子を見て、電子版オンリーでも無理がないようなら、総会での議論を経て、紙版全面廃止の検討も視野に入れる。(その場合、「紙版が必要か、事前に匿名のアンケートをとる」、という案も出ている。)

○あるいは、いずれは『野草』会報(合本)の発送も、木村桂文社に依頼する、という方向も視野に入れるか。(その場合は発送のために会員の住所氏名を木村桂文社に渡すことを、総会です承を取る必要がある。)

<参考> 木村桂文社さんからの概算の見積もり…その2【会報の封入作業費+発送費】

●内容

①シール作成、印刷 ……エクセルデータでの入稿をお願いします

②封筒作成 ……角2サイズクラフト封筒、モノクロ印刷まで

③封入作業 ……会報封入+封緘+宛名シール貼り

④ゆうメール費用 ……100g以内

●費用

①230通発送の場合 ……税込37,500円程

②200通発送の場合 ……税込33,000円程

○あるいは、現在検討中の「外部の業者に会費の請求・徴収を依頼する」プロジェクトの進行次第では、そちらに発送を依頼するという選択肢もあるかも知れない。

*研究機関など、海外への発送は、『野草』刊行とあわせて年2回とし、好並晶・中野徹が担当する。なお、海外在住の会員への発送は原則として電子版のみとする。

<会計について>

*会報印刷費、封筒代などは、あらかじめサブリーダー三須があずかり、年度末に会計との間で清算をおこなう。

*担当者が立て替えをした場合、その都度領収書をサブリーダーに渡して清算する。

〈係の仕事などについて〉

*投稿が少なめで担当者が苦慮することも多いが、21年度から「書評の会・出店」からの投稿があり、大変ありがたい。今後とも会員諸氏の活発な投稿をぜひお願いしたい。会報活性化に向けてもさまざまなアイデアをいただきたい。「反響」も広く募集している。「京劇史研究会」からの投稿も期待している。

*会報係は大勢の担当者が分担して仕事をする、という点が、ほかの係と異なっている。各地に散らばり、それぞれ多忙な担当者が、話し合ったり共通認識をもったりすることは容易ではないが、会報担当者 ML、zoom による担当者会議などを利用して随時意見交換を行い、係としての責任を果たしてゆきたい。

(3)「例会」開催 (担当：濱田)

*「例会」開催数は、年間10回とする(2月、8月は例会を行わない)。対面を基本とするが、企画によってはオンライン開催も妨げない。ハイフレックスは理想だが、会場係に多大な負担がかかるので、もしも条件が整えばお願いする、ということにする。オンライン開催については固定したアドレスは設けず、すでにある zoom 用のアドレスを利用して都度 URL を告知する。オンラインか対面かに関わらず、開催月の最終日曜日午後1:30より開会する(12月は例外)。

*講演(会員外・他領域・外国人研究者などを含む)・書評を年間各1回程度、『野草』関連報告を随時組み入れる。なお、『野草』合評会を5月及び11月に行う(年一回発行になれば11月のみに移行)。合評の討論内容は、次号の『野草』誌上の合評記に反映する。原則として、論文執筆者は合評会に出席することとする。

*「例会」担当は濱田麻矢 (office[アットマーク]c-bungei.jp) とし、例会の企画と報告希望者の調整を行う。申し込む時には必ずタイトルを知らせること(タイトルに変更がある場合は報告月の前々月末までに再度濱田に知らせる)。オンライン開催の場合、例会3日前までに資料の電子データを zoom 用 ML に送付していただきたい。

*現時点での「例会」内容(例会カレンダー)は以下の通り。現時点では9月以降の申し込みは受け付けていない(会場確保がなかなかできなかったことと、あつという間に埋まるのもよろしくないという判断より)が、ぼつぼつエントリーが来ている。

4月28日 立命館大学衣笠キャンパス
総会・「明日へ橋を架ける」—岡田英樹先生「満洲文学」研究シンポジウム

5月26日 オンライン
『野草』112号合評会@オンライン

6月23日 同志社大学今出川キャンパス
閻瑜 田漢における菊池寛の劇作品の受容
藤田敦 一、ファイブデイズ・イン・チベット(「チベット旅行記」)
二、阿来文学『空山』における一考察

7月28日 関西大学千里山キャンパス
許可 蕭紅『馬伯楽』における男性権威の脱構築—馬伯楽の人物像を中心に—
蘭豪 朱西甯の五〇年代

9月29日 関大

10月27日 同志社？

11月24日 オンライン
『野草』113号合評会。

12月22日？同志社？
書評

1月26日 関大？

3月30日 未定

(4)「夏期合宿」(担当：大東・城山・和田・阿部沙・小川)

*2024年度夏期合宿(担当：大東和重・城山拓也・和田知久・阿部沙織・小川主税)については、8月26日から29日の3泊4日で、台湾・台北(福華国際文教會館)にて開催を予定している。張文菁氏の全面的な協力を受け、企画「台湾白色テロを読む」(仮)として、8月27日に白適銘氏(台湾師範大学美術系)と栖来ひかり氏の講演を、28日に国家人權博物館の見学を計画している。コロナ禍により中断を余儀なくされた、海外の研究者との対面による学術交流再開の流れのひとつとなるよう、安全を期して実施したい。

(5)「京劇史研究会」(担当：松浦)

*当面はzoomなどを用いた研究会の開催をめざす。会での報告内容は、『会報』などを利用し公開するよう努める。具体的な活動内容については、『会報』またはウェブサイトを確認していただきたい。

(6)「書評の会・出店」(担当：大東・中野徹・津守)

*本年度も10回程度の例会を開催し、20篇程度の書評を会報に掲載する予定である。

(7)「特別事業」計画(担当：宇野木)

*今後とも研究会全体に関わる研究事業に関しては、合意の上、「特別事業」に位置づけて取り組んでいく。なお、今期においては、『野草』増刊号としての「香港文学特集」刊行が話題に上っている。その他、過去に議論されたものとしては、「野草叢書」構想、「中国現代文学事典」刊行計画などがある。

*なお、「特別基金」に基づく「特別事業」として「野草研究支援」制度を正式に発足させるべきだという従来からの意見も存在していることは確認しておく。その制度設計の大枠は、(1)会員(個人または複数)が実現したい研究企画(出版・プロジェクト研究など)に対する支援制度、(2)数年(3~5年)に1件程度の割合で実施、(3)支援資金額は最大で50万円程度、(4)運営・審査などは「野草研究支援制度運営委員会(仮)」が担う、というのが現在の到達点となっている。

*なお、その際には、これまでに話題に上がった「野草叢書」構想や『野草』バックナンバーのweb公開作業、昨年度の夏期合宿でも議論になった「中国現代文学事典」刊行計画なども視野に入れることが確認されている。

(8)「野草ネットワーク」(担当：青野・菅原・鳥谷・大東・宋新亜・鄭洲)

*コンピュータ・ネットワークを利用した『会報』『野草』編集作業の効率化は定着した。コンピュータ・ネットワークは事務の効率化に留まらず、遠隔地との交流や種々の情報提

供・発信手段として、不可欠のものである。レンタルサーバーによる運営も定着したので、新たな展開が期待される。担当は、全体の統括を青野繁治が、ウェブサイト管理・運営の統括、及び非定型的な更新作業を菅原慶乃が担当し、例会情報・会報目次・『野草』目次・夏合宿情報など定型的な更新作業を宋新亜と鄭洲が担当する。

*『野草』掲載論文の検索を始め、本研究会に関する様々な情報を発信している「中国文芸研究会ウェブサイト」(<https://www.c-bungei.jp/wphp/>)を、さらに充実させていく。

*「野草 ML」(加入手続＝事務局までメールでアドレスを知らせること。手続が完了すると担当者からそのアドレスに通知がなされる)を活用した会員間の交流にも期待したい。

*事務局アドレス宛のメールを事務局MLに転送する作業は、前年度に引き続き、菅原・鳥谷の複数担当制で行う。

*投稿用メール・アカウント yecaobianji[アットマーク]gmail.com による送受信を編集担当者で共有・共同管理する。

*サーバー管理の手順をマニュアル化し、事務局で共有する。

2 運営体制について

*研究会の運営は、事務局と『野草』編集委員会によって行う。

(1) 事務局

*事務局は、総会決定に基づき研究会活動の日常的な実務を担当する。事務局構成メンバーと担当は以下の通り。

青野繁治(『野草』編集顧問)・阿部沙織(会報・夏期合宿)・阿部範之(京都会場予約・名簿管理)・池田智恵(会報・会場予約)・上原かおり(会報)・宇野木洋(特別事業、『野草』第116号編集)・大東和重(夏期合宿、会場予約、普通口座管理補助、ML管理、『野草』第114号編集、書評の会・出店)・大野陽介(会報、大阪会場二次会予約)・小笠原淳(会報)・小川主税(会報、『野草』第111号編集補助、夏期合宿)・河本美紀(会報)・北岡正子(代表、『野草』編集常任)・絹川浩敏(『野草』編集常任)・辜知愚(『野草』第115号編集)・黄英哲(海外交流)・齊藤大紀(『野草』第112号編集補助)・斎藤敏康(『野草』編集常任)・島由子(会報)・城山拓也(『野草』111号編集、夏期合宿)・菅原慶乃(ウェブサイト管理、外部メールのML転送・会場予約)・宋新亜(会報・ウェブサイト更新)・高橋俊(『野草』第112号編集)・田中雄大(会報)・谷行博(『野草』編集常任)・田村容子(会報)・津守陽(会報)・鄭洲(ウェブサイト更新)・唐顥芸(会報)・鳥谷まゆみ(外部メールのML転送)・豊田周子(会報)・永井英美(会報編集リーダー、京都クロネコ便、京都二次会予約)・中野徹(会報サブリーダー、海外補助、書店補助)・羽田朝子(会報、『野草』第113号編集)・濱田麻矢(例会)・福家道信(『野草』編集常任)・藤野真子(会費、名簿管理、振替口座)・松浦恆雄(京劇史研究会、事務局長)・松村志乃(会報)・三須祐介(会報サブリーダー、普通口座管理、京都二次会予約)・南真理(会報)・弓削俊洋(『野草』編集常任)・好並晶(海外、書店)・和田知久(会報・夏期合宿)。

*事務局の住所は以下の通り。

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

関西学院大学商学部藤野研究室気付

(2) 『野草』編集委員会

*『野草』編集委員会は、常任委員(『野草』編集担当経験者など)及び編集担当が事務局構成員を中心とする会員から選出した編集委員若干名により構成される。

*『野草』編集委員会は、『野草』の編集と刊行に責任を持ち、投稿論文の査読を手配する。また「原稿審査(査読)」のあり方、『野草』の編集・投稿規程の策定などを含む中・長期的な課題について検討する。

*『野草』編集委員会は、編集担当が必要に応じ事務局と相談し招集する。

*昨年度に引き続き、今年度中に『野草』編集委員会のあり方について方向性を出すよう検討する。

(3) 会計監査

*財政の健全な執行を図るべく会計監査を置く。会計監査は小川利康とする。